様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１４４００

研究課題名（和文）追跡調査による2つの中間群大学生の「知覚された無気力」特徴の解明

研究課題名（英文）Longitudinal study of students perceived apathy states in academic

研究代表者
住岡　恭子（Sumioka, Kyoko）

岡山大学・社会文化科学学域・講師

研究者番号：００８０５４６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，学業に積極的でも非積極的でもない中間群大学生の「知覚された無気力」の特徴を，4年間の追跡調査によって明らかにすることであった。得られたデータを潜在曲線モデルと条件付き潜在曲線モデルによって分析し，学業領域の知覚された無気力における発達的変化について明らかにした。その結果，労力回避と達成非重視は経年的に増加するが，葛藤には経年的変化がみられないこと，学年と性別が各因子の経年変化における個人差を説明すること，無気力における学生自身の主観的な認知の違いによって，大学生活への重点と大学満足度との関連が少しずつ異なっていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
大学を含む高等教育においては，授業への出席や成績や単位取得状況などの学業における無気力が，要支援学生の早期発見の指標のひとつとなっている。本研究成果によって，学生生活のどの段階でどのような認知的特徴をもつ無気力が生じているかを発達的視点から検討する有用性が示唆された。知覚された無気力の特徴の違いによって，無気力の経年変化に影響を与える要因は異なっており，学生の無気力を一義的に扱うのではなく，より認知的側面を詳細に検討することが必要であることが明らかになった。これは今後の大学教育や，大学における学生支援活動に活用できる視点であろう。

研究成果の概要（英文）：Through a four-year longitudinal investigation, this study aims to describe the features of "perceived apathy" among university students who are neither particularly proactive nor unmotivated in academics. Data from participants were analysed using latent curve models and conditional latent curve models to identify developmental changes in perceived apathy in academics. The results suggest that Avoidance and Non-emphasis increased over the years but not Conflict. Academic year and gender explained individual differences in the longitudinal changes of each factor. Furthermore, it was found that subjective perceived differences regarding apathy influenced the relationship between priorities in campus life and satisfaction with the university.

研究分野：教育心理学

キーワード：知覚された無気力　学業領域　大学生　追跡調査　潜在曲線モデル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

学生の学業上の無気力の問題は，古くから研究が積み重ねられてきたものであり，多くの研究者によって青年期の発達的特徴との関連が指摘されてきた。特に，自分の考えや気持ちや価値観などを重視して行動する傾向にある現代の大学生においては，行動にのみ焦点をあてて無気力を捉えるのではなく，認知的側面から検討する重要性が指摘されてきた。

応募者は 2016 年に，学業領域における「知覚された無気力」の認知的側面として「労力回避」「葛藤」「達成非重視」という 3 つの因子を明らかにし，「積極群」と「非積極群」の間に無気力の程度が位置する「回避―葛藤群」と，「達成非重視群」という 2 つの中間群を見いだした。この中間群の大学生は，大学生活や学業生活への積極的な没入も，大学からの逸脱もしにくくなっていると考えられた。大学卒業までは逸脱することなく学業に取りくめていたはずの学生が，なぜ卒業後に社会人となってから挫折してしまうのか，という問いを解き明かす鍵の一つが，この中間群の学生の特徴に隠れていると推察された。しかし，先行研究における単一時点のみを対象とした調査では，それぞれの特徴や異同が明確に示されなかった。

２．研究の目的

上記の背景から，中間群の大学生の知覚された無気力の特徴や異同を明らかにするためには，大学在学中から卒業後までの経年変化を詳細に検討する必要性が示唆された。そこで本研究では，学業に積極的でも非積極的でもない中間群の学生の「知覚された無気力」の特徴を，大学在学中から卒業後までの追跡調査によって明らかにすることを目的とした。本研究によって現代大学生の特徴と予後を浮き彫りにできれば，そして今後の大学教育や学生支援に役立つ，青年期の大学生への新たな理解の枠組みが得られると期待された。

３．研究の方法

＜予備的調査＞

追跡調査に先立ち，予備的なデータを得るために，大学在学中の知覚された無気力と，新卒社会人の職場適応との関連を検討した。株式会社クロス・マーケティングの協力を得て，2019 年に大学卒業後 3 年以内の社会人 300 名（男性 138 名，女性 161 名，その他 1 名；平均年齢 24.5 歳，*SD*=1.19）を対象に質問紙調査をおこなった。

使用した尺度は (b)ユトレヒト・ワーク・エンゲージメント尺度（UWES-J）日本語版（Shimazu, A., Schaufeli, W. B., Kosugi, S. et al., 2008），(c)職場適応感尺度（野田他，2016），(d)SDS うつ性自己評価尺度　（福田・小林,1983）であった。

＜追跡調査＞

2019 年（Time1），2020 年（Time2），2021 年（Time3），2022 年（Time4）の計 4 回調査を実施した。調査実施時期はいずれも 11 月から 1 月の間であった。Time1 では，国公立大学 1 校と，私立大学 3 校の在学生を対象に，各大学に所属する教員を通じて，講義時間内に質問紙調査を実施あるいは Google Forms による調査への回答を依頼した。Time2 から Time4 は，Time1 においてメールアドレスを提供した協力者を対象に個別メールを送付し，その時点での大学在学生を対象に，Google Forms による調査への回答を依頼した。回答のあった調査協力者のうち希望者には，毎回謝礼として図書カードネットギフト 500 円分を後日メールで送付した。回答者は Time1:557 名，Time2:193 名，Time3:120 名，Time4:52 名であった。

Time1 では，性別，在学校，学年，留年経験の有無，浪人経験の有無，進学時の志望度に対する 4 段階評価を尋ねた。その後 Time1 から Time4 にかけて，(a)学業における知覚された無気力状態尺度（PASS-A）（大西，2016），(b)大学生活の重点項目（髙坂，2016），(c)大学に対する満足度を測る 5 項目（ベネッセ教育総合研究所，　2009）を測定した。

４．研究成果

＜予備的調査＞

相関分析の結果，大学在学中の知覚された無気力における「労力回避」は，新卒社会人のワーク・エンゲイジメント，職場適応感，SDS いずれとも，有意な関連性が認められなかった。「葛藤」は，ワーク・エンゲイジメントの「活力」，職場適応感の「劣等感のなさ」との間に負の関連性，SDS との間に正の関連性，「達成非重視」については職場適応感の「劣等感のなさ」との間に負の関連性，SDS との間に正の関連性がそれぞれみられた。この結果から，大学在学中に無気力への葛藤があった者は，新卒社会人となった後に，劣等感を持ちやすく，仕事に活力を見いだせなくなり，学業上の達成感を重視しないという無気力を有した者は，就職後に劣等感を抱きやすいことが示唆された。

先行研究に従って，クラスタ分析を行った結果，先行研究と同様の 4 クラスタが得られた（Figure1）。分散分析の結果，ワークエンゲイジメントの「没頭」は達成非重視群が回避―葛藤群よりも高く，職場適応の「被信頼・受容感」は非積極群が回避―葛藤群よりも高く，劣等感の

なさは，積極群が非積極群よりも高かった。ここから，大学在学中に無気力の値が高かった学生が，卒業して就職した後に深刻な不適応に陥ることは必ずしもないことが示された。

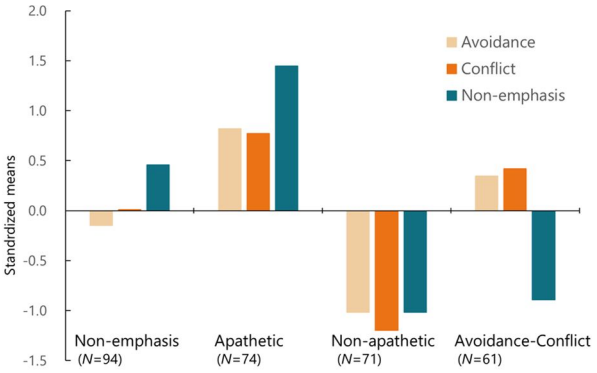

Figure 1 Cluster analysis of PASS-A（ICP2021+にて発表）

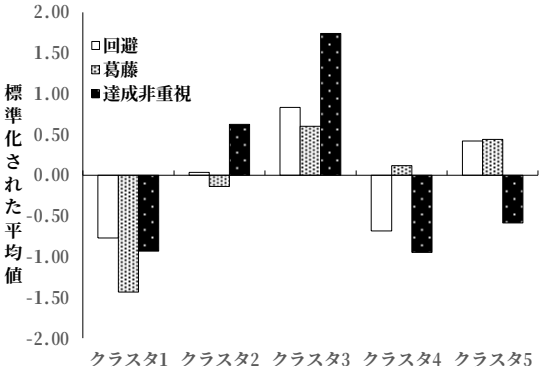

Figure2 クラスタごとの標準化された平均値(PASS-A)

＜追跡調査＞

Time1 のデータのみを使用してクラスタ分析を行ったところ，先行研究と同様の 4 クラスタが得られなかったため，クラスタの解釈可能性から検討しなおし 5 クラスタを採用した（Figure2）この結果から，現代の大学生の無気力の傾向は，より細分化・多様化していると考えられた。そこで，以降はクラスタ分析ではなく，各因子の経年変化に絞って分析を行う方針とした。

調査計画段階では，Time1 で大学 3,4 年生の対象者については，新卒社会人となるまでの追跡調査を実施する計画であったが，Time1 時点で収集したできたデータが大学 1,2 年生のものが圧倒的に多く，加えて 2020 年からの新型コロナウイルスの影響もあったことで追加のデータ収集が困難となったため，大学在学中の経年変化に絞って分析を行うこととした。

まず，潜在曲線モデルと条件付き潜在曲線モデルを用いた分析から，知覚された無気力の初期値や経年的変化，およびその個人差を説明する要因を検討した。その結果，労力回避と達成非重視は経年的に増加しているが，葛藤には経年的変化がみられないこと，男性の方が女性よりも労力回避と達成非重視の初期値が高く，女性の方が男性よりも葛藤の初期値が高いこと，Time1 での学年が高い学生の方が，学年が低い学生と比べて全ての下位尺度の初期値が高く，さらに労力回避と達成非重視の変化率は Time1 での学年が高くなるにつれて低下することが示された（Table1）。

Table 1　条件つき潜在曲線モデルの推定結果

	切片	傾き	曲率
	推定値 [90 %CI]	推定値 [90 %CI]	推定値 [90 %CI]
労力回避			
性別	0.29 [0.17, 0.42]	0.03 [-0.09, 0.15]	
在学校	0.07 [-0.11, 0.25]	-0.09 [-0.24, 0.05]	
学年	0.16 [0.06, 0.26]	-0.16 [-0.27, -0.04]	
留年経験	-0.07 [-0.47, 0.32]	0.30 [-0.09, 0.68]	
浪人経験	-0.17 [-0.42, 0.08]	0.25 [-0.03, 0.51]	
進学時の志望度	0.04 [-0.02, 0.11]	0.02 [-0.04, 0.07]	
葛藤			
性別	-0.15 [-0.28, -0.01]	0.03 [-0.30, 0.37]	0.01 [-0.14, 0.16]
在学校	-0.12 [-0.30, 0.07]	-0.12 [-0.55, 0.33]	0.00 [-0.21, 0.22]
学年	0.14 [0.04, 0.25]	-0.11 [-0.40, 0.17]	-0.003 [-0.15, 0.16]
留年経験	0.41 [-0.01, 0.82]	0.80 [-0.57, 2.07]	-0.30 [-0.96, 0.44]
浪人経験	-0.13 [-0.40, 0.14]	0.33 [-0.34, 1.02]	-0.04 [-0.36, 0.27]
進学時の志望度	-0.03 [-0.10, 0.04]	-0.05 [-0.20, 0.11]	0.02 [-0.04, 0.09]
達成非重視			
性別	0.24 [0.07, 0.42]	0.01 [-0.14, 0.16]	
在学校	-0.02 [-0.26, 0.22]	-0.01 [-0.20, 0.16]	
学年	0.42 [0.28, 0.55]	-0.30 [-0.43, -0.17]	
留年経験	0.42 [-0.12, 0.97]	0.38 [-0.09, 0.86]	
浪人経験	-0.07 [-0.42, 0.27]	-0.02 [-0.34, 0.30]	
進学時の志望度	0.03 [-0.06, 0.12]	-0.04 [-0.11, 0.03]	

注) CI = Credible Interval。推定値は全て事後中央値を表す。

さらに，潜在曲線モデルと条件付き二変量潜在曲線モデルを用いた分析を用いて，学業における知覚された無気力の経年変化と，大学生活の重点と大学満足の経年変化との関連を探索的に検討した。その結果，入学当初の大学生の多くは勉強や資格取得などの学業に主に重点をおいているが，その後の学生生活のなかで重点をおく項目が移り変わることが示された。また知覚された無気力は，大学内の活動に重点をおいていると生じにくく，大学外の活動に重点をおいていると生じやすいことが示唆された。さらに，大学満足度の初期値は労力回避や達成非重視の初期値と関わっており，葛藤と達成非重視の初期値は大学満足度の経年的な低下に関連していた。労力回避の経年変化には趣味への重点，葛藤の経年変化には自己探求の重点，達成非重視の経年変化には教員への満足度が，それぞれ特徴的に関わっていることも明らかになった。

大学においては，授業への出席や成績や単位取得状況などの学業における無気力が，要支援学生の早期発見の指標のひとつとなっている。本研究によって，学生生活のどの段階でどのような認知的特徴をもつ無気力が生じているかを発達的視点から検討する有用性が示唆された。知覚された無気力の特徴の違いによって，無気力の経年変化に影響を与える要因は異なっており，学生の無気力を一義的に扱うのではなく，より認知的側面を詳細に検討することが必要であることが明らかになった。

＜引用文献＞

大西 恭子 (2016). 学業領域固有の知覚された無気力の探索的研究　教育心理学研究，*64*, 221-231.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 住岡 恭子、和泉 里佳	４．巻 52
２．論文標題 新型コロナウイルス感染症状況下における大学生の主観的ストレス	５．発行年 2021年
３．雑誌名 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要	６．最初と最後の頁 11-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/63108	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 住岡　恭子	４．巻 1
２．論文標題 学業領域固有の知覚された無気力と大学生活における不安や悩み、学業対処方略との関連	５．発行年 2019年
３．雑誌名 広島文教大学心理学研究	６．最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 住岡 恭子，山本 康裕，山内 裕斗	４．巻 95
２．論文標題 学業領域の知覚された無気力における発達的変化の検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 The Japanese journal of psychology	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.95.23303	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 住岡 恭子、山内 裕斗	４．巻 57
２．論文標題 本邦における質問紙を用いた心理学的縦断研究の概観	５．発行年 2024年
３．雑誌名 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要	６．最初と最後の頁 21-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/66826	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 住岡 恭子	4．巻 24
2．論文標題 現在の学生の特性と心理職養成教育	5．発行年 2024年
3．雑誌名 臨床心理学（金剛出版）	6．最初と最後の頁 33-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 住岡 恭子、秋田 美月、石村 竜大、井上 希美、坂田 奈菜子、森 崇人、森脇 日菜子、山本 美玖、山内 裕斗、瀧北 文、重藤 彩伽、河野 穂波、小野 遥香、島津 柊、月輪 花菜、草野 結子	4．巻 76
2．論文標題 University Students’ Perceptions towards Teachers	5．発行年 2023年
3．雑誌名 岡山大学文学部紀要	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/okadai-bun-kiyou/66163	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 住岡 恭子
2．発表標題 追跡調査による大学生の「知覚された無気力」の経年変化の検討
3．学会等名 日本教育心理学会第64回総会
4．発表年 2022年

1．発表者名 住岡 恭子，和泉 里佳
2．発表標題 新型コロナウイルス感染症状況下における大学生のストレス
3．学会等名 日本心理学会第85回大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 住岡 恭子
２．発表標題 学業領域固有の知覚された無気力と大学生活の重点の関連
３．学会等名 日本教育心理学会第63回総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kyoko Sumioka
２．発表標題 Relationship between recent graduates’ adjustment to work and perceived apathy during academic life.
３．学会等名 The 32nd International Congress of Psychology
４．発表年 2021年

１．発表者名 住岡　恭子
２．発表標題 新卒社会人の職場適応と大学在学中の学業領域固有の知覚された無気力の関連
３．学会等名 日本教育心理学会第61回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 住岡 恭子，山内 裕斗，重藤 彩伽，秋田 美月，石村 竜大，井上 希美，草野 結子，坂田 奈菜子，森 崇人，森脇 日菜子，山本 美玖
２．発表標題 大学生が持つ大学教員に対するイメージの量的検討―大学への進学動機との関連から―
３．学会等名 日本心理学会第87回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 瀧北 文，山内 裕斗，小野 遥香，草野 結子，河野 穂波，島津 柊，月輪 花菜，住岡 恭子
２．発表標題 大学生が持つ大学教員イメージ―自由記述の分類・整理による検討―
３．学会等名 日本心理学会第86回大会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 住岡　恭子	４．発行年 2022年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 160
３．書名 「なまけ」の心理学的研究による中間層大学生の発見	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関